

たった一文字のかなでさえも読むことのできない五歳の脳障害児が漢字を教えたらどんどん読んだといったら、みなさん、どう思うでしょうか。そんな馬鹿な……というのが、大方の反応だと思います。しかし、事実なのです。

その子は一歳半の時にダンプカーにはねられ、頭蓋骨陥没という重傷を負いました。幸い命はとりとめたものの脳に後遺症が残ったのです。医師からは、回復は絶望的と言われていたのですが、せめて自分の名前だけは読めるようにさせたいと思い、それこそ両親は一生懸命になって文字を教えたそうです。しかし、一年たっても言葉は覚えられないし、一文字のひらがなさえも読めないと言うのです。子どものお母さんは、脳に障害があるから言葉が出ないと思い込んでいました。でも、二年、三年経てば、せめてアーとかウー、マンマといった言葉が出てくると思っていたのです。そうなったら、いろいろな言葉を教えようと考えていました。しかし、これでは逆です。脳に障害があるから言葉が出ないのではなくて、言葉が出ないから脳が発達しないのです。

脳に障害があったとしても、脳全体に障害が生じているということはないのですから、声をかければ、残った健全な脳がイキイキと動き出し、少しずつ頭の回転がよくなっていくということをお話しました。そして、子どもの脳を活性化させるためには、お母さんでもお父さんでも誰でもいいから、できるだけ話しかけてやること、そして、漢字を覚えさせることの重要性をお話しました。

毎日、一枚の漢字カードを15回、1回に10秒くらいかけて見せながら読んでやる、という方法を教えたのです。一日の学習時間はわずか二

分半ほどですから、この子にとっても負担にはなりません。その後、10日くらいたって、7つの漢字が読めるようになりました」と喜びの手紙が来ました。五歳になるまで、まったく文字が読めなかった子どもが、たった一週間で7つの漢字を読めるようになったのです。半年後、その子どもに会ったら、表情がまるっきり変わっていました。きりっと引き締まったいい顔になっていました。その時には100以上の漢字が読めるようになっていました。目の輝きも違っていたのです。

そして一年半後の手紙には、「覚えた漢字は300字になりました。今では“かな”もすべて覚えました」とありました。

現在、小学校五、六年生が一年に学習する漢字はおのこの約180字ですが、習得できるのは学級平均で三分の二くらいだといわれています。つまり二年間で300字の漢字を覚えることは大変なことなのです。それを考えると、五歳の脳障害児がこれだけ覚えたということは驚くべきことといえるでしょう。

もっと素晴らしいことには、この子が漢字を覚えていく過程で、情緒が安定したことです。それまでたびたび癇癪を起こしていたことを我慢できるようになったこと、病院で診察を受けるときも聞き分けができて、一人で診察を受けられるようになったことなどが書かれていました。

ポイント:人間として一番必要な能力というのは本を読む力だと思うのです。本を楽々と読めるのと苦勞して読むのでは一生の間に大変な違いが出て来ます。ですから子どもにしてやれる一番よいことは、本を読む能力をつけてやること、つまり漢字を教えることです。